

7. アフリカ南部——干ばつ緩和

3月後半の3週間は平年に比べてかなり雨が多かったので、アフリカ南部で干ばつに見舞われていた地域では水供給が増加した。しかし雨の降るのが遅すぎたため、

以前の農業被害を解消するには至らなかった。来年までの食糧供給の見込みは依然として悲観的である。

(注：上記各項目の番号は図中の番号に対応している。)

(気象庁気候変動対策室 真野裕三)

≡≡≡ 支部だより ≡≡≡

東北支部講演会の開催

東北支部では、昭和59年1月25日盛岡市において下記の講演会を開催した。市の広報紙で宣伝されたこともあって新聞社、放送局なども取材に訪れ非常に盛会であった。

日 時 昭和59年1月25日 13時30分～16時

会 場 岩手県立図書館集会ホール

参加人数 100余名 (気象台, 岩手大学, 農業試験場, NHK, 岩手日報, 一般)

講演者及び講演内容

(1)「局地現象の力学予報について」

二宮洸三 (仙台管区気象台技術部長)

予報官の天気図解析に基づく天気予報 (総観気象的予報) は過去長い間、天気予報の主要の手段であったが、最近の20年間に、大気の流れを支配している物理法則 (数式として書き表される) に基づいて方程式を立てて電子計算機で解くことによって天気予報を行う“数値予報”と呼ばれる予報技術が急速に発達した。最近まで、この数値予報は、高気圧・低気圧などの大規模な現象を予報できるのみであったが、この数年間の進歩により、

天気により密接に関係する小規模現象までも予報できるようになって来た。

まず、数値予報の原理とその実際のやり方の概要を説明し、ついで、2、3の激しい気象現象についての数値予報の結果の実例を紹介する。

(2)「地球回転と大気の運動」

角田忠一 (水沢緯度観測所天文観測研究部長)

地球は誕生以来自転を続け、月と共に地史学的時間経過をへて今日に至っていると考えられる。最近地球回転のゆらぎ (自転軸方向のゆらぎと自転速度変化) の観測精度の向上と気象観測網の拡充に伴って、地球回転のゆらぎと大気の運動の関係、特に自転運動と大気大循環の密接な関係が明らかになってきた。すなわち偏西風の角運動量の増加 (減少) と固体地球の自転速度の減少 (増加) がよく対応し、地球全体の自転角運動量が保存されていることが示される。日本においては日本列島の地形、海洋流および地殻運動などの特殊な環境を考慮して、地球回転運動と気象学の両分野の研究協力をすすめることが必要であろう。